

「移動する子ども」学からケイショウゴ教育を考える

川上郁雄・太田裕子・中野千野・大山美佳

発表要旨

幼少期、成長期に複数言語環境で成長する子どもが世界的に増加している。その子どもたちは異なる音や文字による意味世界に日常的に触れながら、他者と交流し、成長していく。そのような複数言語環境で成長する過程の体験は、自己にとって意味のある経験と記憶として刻まれ、複合的な自己形成が進み、人生全体に引き継がれていく。

これらの子どもの、空間、言語間、言語教育カテゴリー間を移動する経験と記憶を「移動する子ども」(川上、2021)と呼ぶ。本パネルでは、「移動する子ども」という分析概念による実践研究の学(「移動する子ども」学)の視点から、ケイショウゴ教育の実践の可能性を議論することを目的とする。

本パネルは以下の4つの研究発表からなる。

①「移動する子ども」学とケイショウゴ教育(川上郁雄)

本発表は、「移動する子ども」学の理論的な考察として、「モビリティーズ・パラダイム」、子どもの脳の発達、「移動知」、「情動」「自己物語」の視点から、複数言語環境で成長する子どもの成長・発達の特徴を述べ、ケイショウゴ教育の理論的考察を試みる。

②「移動」の中での子育て一言語、教育、人生の意味の再構築—(太田裕子)

本発表は、日本のシュタイナー学校に子どもを通わせる中国、韓国出身の親のライフストーリー研究から、「移動」の中で子育てする経験が、親の価値観を変容させ、再構築する可能性を持つ点を論じる。さらに、母国を離れ日本で子育てをする親の言語、教育、人生に対する価値観がどのように変化したのかを分析しながら、ケイショウゴ教育との関わりを検討したい。

③複言語の子どもを主人公とする絵本の「読み聞かせ実践」(中野千野)

発表者は自身が執筆した、複言語の子どもを主人公とする絵本の「読み聞かせ実践」を国内外で実施してきた。本発表では、実際の「読み聞かせ実践」を一部紹介しつつ、これまでの活動を通して得た参加者のフィードバック、コメントから、複言語の子どもを巡るまなざしの変容、再構築のプロセスを分析する。その上で、絵本の「読み聞かせ」という実践の意味と可能性が複言語の子どものケイショウゴ教育とどのように繋がっているのかについて検討したい。

④ライフストーリーをもとにした読解教材の開発(大山美佳)

本発表では、移動する時代を生きる人々のライフストーリーをもとに、10代の若者向け読解教材を開発するプロジェクトの経緯と実践の要点を報告する。教材化にあたっては、語り手の人生の転機に着目し、それを読み手の若者が解釈できるように工夫した。複言語・複文化資源と向き合いながら生きる人のライフストーリーを、成長途上の若者が読み取って話し合うことを通して、自らと向き合い、どう生きるのかを考える実践を目指している。この教材開発から、ケイショウゴ教育の実践について論じたい。

参考文献

川上郁雄 (2021) 『「移動する子ども」学』 くろしお出版.

トムソン木下千尋 (2021) 「継承語から繫生語へー日本と繋がる子どもたちのことばを考える」『ジャーナル「移動する子どもたち」ーことばの教育を創発する』 12, 2-23.

トムソン木下千尋 (2022) 「ケイショウゴ教育の変遷についてーオーストラリアとブラジルを例に」 松田真希子・中井精一・坂本光代編 『「日系」をめぐることばと文化』 くろしお出版, pp. 18-30.